

映画

の中の

子ども
たち第19回
ショートターム

—曙光—

川崎 二三彦

過酷な生を生きる

「これはフィクションじゃなくて、実は本当にあったことなんだ」と錯覚するほどの現実感に圧倒されて、映画が終わってからもうすぐには立ち上がれなかった。

登場人物のさまざまなエピソードが折り重なり、渦となって頭の中を駆け巡る。映画を観たのは、私が長くかかわっている児相研（全国児童相談研究会）の第40回記念東京セミナーが終わって、児童相談所の元同僚としばし歓談した後のことだったけれど、児童相談や児童虐待問題の世界に身を置く人には、是非とも観てほしいと思わせる映画だった。



舞台は、さまざまな家庭問題をかかえ、おそらくは何らかの症状を持っている思春期の子どもたちが暮らす短期入所のグループホームである。映画の導入部で、「入所の期間は12か月以内、ただし、期限内に退所できない子どもも多い」といった字幕が入る。

日本で言えば、情緒障害児短期治療施設と児童自立支援施設、さらには自立援助ホームを足し合わせたようなところだろうか。「SHORT TERM 12」という原題は施設名らしいが、してみると「12」とは12か月という意味だろうかと考えたりしたが、詳しくはわか

らない。

さて、ここでは施設に落ち着けず、飛び出してしまう者もしょっちゅうだ。冒頭のシーンもそこから始まる。施設のルールとして、敷地内ではホールディングできても、一旦施設から外に出てしまえば、勝手に子どもの身体に触ることはできないという。そう言えば、かつて児童相談所で一時保護していた無職少年が、「こんな所は出て行く」と宣言して堂々と無断外出したことがあった。慌てて後を追いかけて、駅構内で長々と話し合ったのだが、親に拒否され、橋の下で暮らしていた彼は、行く当てもないのに、私の説得に次第に苛立ち、最後は駅の金網を蹴り上げて壊し、姿を消してしまった。過酷な人生を生き抜く本作の若者たちを見ていると、そんな経験が思い出されて胸が苦しくなるのを禁じ得ない。

人が支えられるとは？

とはいえ、映画は、子どもたちを過度に悲劇的に描くのもなく、彼らをケアする側の人たちについても、その仕事と人生を的確に表現する。

心に残ったいくつかのシーンを記してみよう。まもなく18歳になり、施設を出て行くことが決まっているマーカスだ。彼が創ったラップを聴いていて、震えてきた。施設では禁じられている悪態をふんだんに歌詞に取り入れ、渾身の限り母親への恨み辛みを毒つくのである。その内容が真に迫っているせいか、ふと見ると、スタッフのメイソンも、渡されたボンゴでリズムをとりながら聴き入っているではないか。

もう1シーン紹介してみたい。新しく入所してきて、「こんなところで友だちなんか作る気はない」などと言い放つ少女ジェイデンだ。もちろん彼女

も人には言えない過去を持つ。その彼女の誕生日。やって来るはずだった父親が現れず怒りが爆発、彼女は取り押さえられ、文字どおりの「冷却室」で女性スタッフ、グレイスと過ごすのである。彼女に自傷の痕を見つけたグレイスは自らの不幸な過去を打ち明け、ジェイデンも次第に落ち着きを取り戻す。

私が気に入ったシーンはこの後にやってくる。気を取り直した彼女が「冷却室」を出てくると、入所していた他の子どもたちが、ろうそくを点したケーキで、一斉に彼女の誕生日を祝うのである。

決して声高に叫ぶのではない。けれど、人が人によって支えられるというのはこういうことだと、私は思い知らされる。

自立と再生の始まり

ところで、この映画の主人公は、実は入所の子どもたちではなく、彼らを支える女性スタッフ、グレイスなのである。子どもたちが起こすさまざまな出来事に対処する中で、次第にスタッフの物語が明らかになっていく趣向は、本作の味わいの一つである。

たとえば、ジェイデンの過去とグレイスの妊娠がオーバーラップし、妊娠を喜ぶパートナーのメイソンとは対照的に、なぜかグレイスはそれを拒否し、二人の関係が壊れかけるのである。私が男だからかどうか、メイソンの気持ちはすぐに共感できても、グレイスの態度と行動は、にわかには理解しがたいものであった。だが、それゆえに彼女の行動は、彼女の歩んだ歴史とともに、いつまでも私をとらえ、考えさせることになる。

この映画のよさは、子どもたちとスタッフの双方が、この「SHORT TERM 12」という場の中で、つまりは彼らの交わりの中で何かに気づき、いつの間にか成長し、再生していく点にある。それこそ、私たちがめざす理想の姿であり、長く子どもたちとかかわり、彼らに育ててもらったと実感している私の率直な感想だ。付け加えれば、それが見事に形象化されているからこそ、



この作品は秀逸なのである。

先に私が思い出した無職少年のことに、もう少し触れたい。駅から姿を消して数週間後、彼が児童相談所に電話してきた。聞けば、自暴自棄になってたばこ2、3本分の葉を食べたという。深夜だったが、担当ワーカーが急遽出勤し、手当てしてくれる病院を探して処置するのに付き添い、再び一時保護して一緒に住み込みできる就職先を探す。そして、生活必需品の何も持たない彼のために、ワーカーは職員に呼びかけて中古の家電などを揃えて送り出してやったのであった。

こうしてみると、彼が映画の登場人物の一人となり、映画に出てきた少年や少女が、現実空間に飛び出して実際に生活していたとしても全然おかしくない。私はそんな不思議な気分が襲われて映画館を出たのであった。

* 2013 / アメリカ

* 鑑賞データ 2014/11/16 シネマカリテ

* 公式 HP <http://shortterm12.jp/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/37263>

第1回	プレジャス	* 題名を click すると本文へ ジャンプします。
第2回	クロッシング	
第3回	冬の小鳥	
第4回	その街のこども	
第5回	八目目の鱗	
第6回	いのちの子ども	
第7回	ラビット・ホール	
第8回	サラの鍵	
第9回	少年と自転車	
第10回	オレンジと太陽	
第11回	孤独なツバメたち	
第12回	明日の空の向こうに	
第13回	旅立ちの島唄	
第14回	くちづけ	
第15回	もうひとりの息子	
第16回	メイジーの瞳	
第17回	ファイ	
第18回	思い出のマーニー	